

B-9 博夕織に関する研究(第1報) 木附子媒染生糸の物性
香蘭女子短大 坂根嘉子 ○萩原寿美子 藤瀬ツ子 筒井亮毅

目的 従来から絹の風合改良および増量剤として使用されてきた木附子は、博夕織業界において、献上博夕のヨコ糸媒染剤として博夕帯独特の風合をもたせるために使用されてきた。この木附子による媒染は、染色と増量が同時にでき、練糸に近い風合のものが得られるなどの優れた特色を有するが、その反面木附子と生糸との結合力が弱いことや、生糸中のセリシンが温湯に溶解する欠点がある。従って木附子媒染生糸の増量率と物性について検討を行なった。

方法 木附子100gを2ℓの脱イオン水で熱時抽出し、0.5~74%の各種濃度の木附子液を調製した。これに生糸を浴比30:1で1時間煮沸浸漬後、冷却し、30℃でさらに20時間振盪しながら浸漬した。生糸は軽く水洗後、1部は105℃で乾燥し乾燥重量を求めた。残りの試料を2分してその1つは常温風乾し、他のものは95℃15時間熱処理を行った。これらの試料についてTENSILON万能引張試験機Model UTM-4で切断強度とヤング率を測定した。

結果 浴比30:1において生糸の増量は木附子液0.5~4%範囲内では濃度に比例して増加し、2%溶液において約30%の増量が認められた。生糸の切断強度は木附子媒染によって殆んど変化が認められなかった。ヤング率は生糸の増量率が高くなるに従って増加した。また熱処理生糸は常温乾燥の生糸より一般に高いヤング率を示した。